エヌ・アイ・イー
わかやまNIEだより

Newspaper in Education 第22号 2022.2 和歌山県NIE推進協議会

事務局:〒646-8660 和歌山県田辺市秋津町100 紀伊民報社内 TEL.0739-24-7171 FAX.0739-25-3094 E-MAIL:nie@kiiminpo.jp

GIGAスクール構想のもとでのNIE授業の役割

和歌山県NIE推進協議会会長　和歌山大学教育学部教授　船越　勝

コロナ禍のなかで、Withコロナのライフスタイルと学びの様式を新たにデザインしていくために、現在、文部科学省は、GIGAスクール構想を元々の計画よりも大幅に前倒しして、急速に整備を進めています。周知の通り、GIGAスクール構想とは、既にほぼ実現されたと言われている一人一台の端末と高速通信環境の整備をベースとして、Society5.0の時代を生きる子どもたちのために、「個別最適化され、創造性を育む教育」を実現させることをめざした施策です。ここでいうGIGAとは、「Global and Innovation Gateway for All」の略で、「すべての人にグローバルで革新的な入り口を」という願いが込められています。

また、こうしたGIGAスクール構想の前提となっている未来社会の姿は、Society5.0と言われており、狩猟社会(Society1.0)、農耕社会(Society2.0)、工業社会(Society3.0)、情報社会(Society4.0)に続く、新たな社会の姿を指すもので、具体的にはサイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立させる、人間中心の社会のあり方を目指しています。内閣府のHPによると、ここでいう経済発展に関する課題は、具体的には、エネルギーの需要増加、食料の需要増加、寿命延伸、高齢化、国際的な競争の激化、富の集中や地域間の不平等があり、また、解決が求められている社会的課題としては、具体的には、温室効果ガス(GHG)排出削減、食糧の増産やロスの削減、社会コストの抑制、持続可能な産業化、富の再配分や地域間の格差是正などが考えられています。こうした課題を、Society5.0の社会では、IoT、ロボット、AI等の先端技術をあらゆる産業や社会生活に取り入れ、格差なく、多様なニーズにきめ細やかに対応したモノやサービスを提供することによって実現していこうとしているのです。そして、このGIGAスクール構想は、こうした未来社会を実現させるために大きな役割を果たすことが期待されているのです。

しかし、皆さん、考えてみて下さい。Society5.0の社会に移行、発展していくためには、GIGAスクール構想により、すべての子どもたちのICT活用能力や情報活用能力を大きく伸ばしていくことが確かに求められます。それは時代の発展に伴う必然的な教育課題です。また、こうしたデジタル化は欧米諸国など海外と比較すると、日本は非常に遅れていることが指摘されており、だから、こうしたデジタル化を総合的に担う政府の機関としてのデジタル庁の新設も計画されてもいるのです。ただ、先に挙げた経済発展と社会的課題の解決の両立を図っていくことは、検索して答えが出るような、既に答えが出されているものではなく、答えのない「問い」、「正解」のない問題なのであり、こうした課題に挑戦していくためには、これまでの学問的成果とグローバルで且つローカルな社会の現実に根ざし、プロの記者によって書かれた確かな情報、すなわち、新聞記事を依拠しながら追究していく「知性」が求められます。こここそ、私は新聞を活用しながら行うNIEの存在意義があるのだと考えています。

今号には、私たちの和歌山県で追究されてきた和歌山市立高松小学校の「いっしょに読もう！新聞コンクールへの取り組み」や県立日高高等学校附属中学校の「新聞を活用した教育活動」の実践が掲載されています。こうした成果に学びながらも、和歌山県でのNIEの取り組みを皆さんと語り合いながら今年も進めていくことができればと思っています。本年もどうぞよろしくお願いします。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」への取り組み

和歌山市立高松小学校　教頭　赤阪　麻起子

関連付けたり比較したりしながら深く考える思考力、適切な方法を選ぶ判断力、分かりやすく伝えるための表現力。こういった説明は、新しい学習指導要領になる前にいろんなところで何度も読みました。ですが、児童は容易に習得できるものではありませんし、指導する側としても、どのような学習活動を通して身に付けさせるといいか、戸惑うこともあると思います。

数年前から本校では「いっしょに読もう！新聞コンクール」に参加しているのですが、この取り組みが、思考力・判断力・表現力といった学力を育むために、ぴったりだと思っています。

新聞を読んで情報を得ることにとどまらないところが、さまざまな学力を身に付ける機会となっているからです。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」は、まずは新聞を読むことから始めます。ですが、読むことに終始しません。最終的には、選んだ記事についての自分や身近な人の意見を一枚の用紙にまとめまるのですが、そこに至るまでに多様な学習活動を経ることになります。

具体的には――感銘を受けた記事について、自分の経験やすでに持ち合わせている知識などと関連付けて、記事についての自分の考えを形成します。次に、記事の内容や自分の意見を友達や家族に伝え、相手に感想を求めます。最後に、自分や家族、友達の意見をまとめて用紙に記入します。そのときには、書く内容を整理して削ったり、逆に内容を補って膨らませたりします。このような一連の学習活動をたどることで、さまざまな力が求められ、みがかれていきます。

何度か参加するうちに、指導のコツをつかめるようになってきました。新しく取り組まれる先生が増えるといいので、紹介します。

1つめは、読ませる新聞です。児童が日頃から読み親しんでいるものがあれば、それがいいです。ですが、普段読んでいない子には、地方新聞が身近な話題が満載でお勧めです。知っている人や知っている物事については、自分の経験や知識と関連付けて考えることができるので、取りかかりやすいです。

2つめに、どの記事にするか迷って決められない子には、記事の見出しや内容ではなく、写真で選ばせることです。強く印象に残る写真の記事を選ばせると、感想や提案を抱きやすくなります。

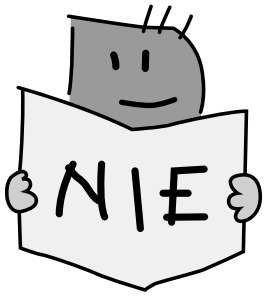
3つめは、考える視点をしぼらせること。例えば、記事を読む前の自分と読んだ後の自分の変化に着目させたり、これからの自分について考えさせたりします。家族や友達の意見を聞いた後には、相手の意見に賛同できるかどうか、それはどうしてか。相手の意見を知って気づいた新しい考えはどんなものか。このようなポイントで記事、というよりむしろ自分に向き合わせます。

他には、普段から新聞を身近なものにすること。例えば、新聞を読む大人の姿を見せたり、児童の手の届く範囲に置いて目にする機会を増やしたり、記事の内容を話題にしたり。これらを意図的に行って、新聞は大人だけのものではない、子供も積極的に読むものという雰囲気をつくります。

最後に、「いっしょに読む」こと。一緒に感動したり、対話しながら感想を共有したりして、身近な大人が一緒に読むことはとても大切で、この取り組みのポイントだと思います。児童一人の活動にしないことで、興味を持続し、主体的に自分の思いを表現できるようになります。

新聞を読んで意見を持つなんて、立派な社会の一員です。

今から習慣化して、社会の出来事に積極的に向き合い、自分の課題として解決に努める子を、新聞を活かして育てていきたいと思います。



新聞を活用した教育活動

日高高等学校附属中学校　教諭　松本　能

本校の教育活動における目標の大きな柱は、『人間力』の育成、特に「課題を設定する力」「情報を収集し、整理する力」「まとめ、発信する力」「課題を設定し追求する力」を身につけたい力として位置付けている。その目標に合致し、重要な役割を果たしてくれるものが新聞であると感じる。本校では、私が赴任する前から新聞を生かした教育に力をいれており、それを引き継ぐかたちで現在に至っているが、生徒たちとふれあう中で感じることは、子どもは好奇心や探求心に満ち溢れており、それをいかに学びとして結び付けられるかということである。

本校では、毎朝の読書の時間を使い、落ち着いて新聞を読む時間をとり、現在の世の中でのできごとやニュースに触れる機会をつくっている。生徒たちが、各クラスに毎朝配布される新聞に必ず週1回以上は目を通す機会を設けている。その中で、気になる記事や事件などを取り上げ、スクラップすることをおこなっている。

当初は、興味を持たせるためだけに行わせており、それをどのように活用するのか、までは考えていなかったが、総合的な学習の時間や社会科をはじめとする学習活動に活用する生徒が自然と出てきたときには大変驚くとともに、新聞の持つ力を改めて感じることができた。

また、『新聞の向こう側』と題したワークシートを作成して取り組んでいる。これは、教師が選んださまざまな新聞の記事や社説、コラムなどを主題記事として設定し、生徒に読ませる。次に、その主題記事に出ている知らない語句、意味が分からない語句を調べ、語彙力の向上を図る。そして、その主題記事に関する質問や、賛成・反対意見、自分の考えなど、その時に考えさせたいことに応じて、意見を述べる、といったものである。さらにそれに取り組んで考えたことをまとめ、クラスメイトに発表する機会を設け、生徒の発表力や表現力の育成をおこなっている。

以上2つの実践の集大成として、毎年の「いっしょに読もう！新聞コンクール」への全校生徒での応募を行っている。今年度は、私が赴任して最多の入賞と、全国奨励賞（中学校の部）をいただくことができた。

これらの活動を通して、最も感じることは、思考力や表現力、さらに先に述べた本校の掲げる力のもととなるのは、幅広い知識と、多様な考えに触れる機会だということである。

かつては、多くの家庭で当たり前のように新聞を定期的に購読し、メディアも新聞、テレビなどが中心で、世の中で起こっている様々なニュースやできごとに触れる機会が多く、それらが共有されている時代であった。しかし、スマートフォンやインターネットの普及で、情報が膨大になり過ぎて、取捨選択や情報整理ができない、あるいは、画面越しに自分が興味あるものしか見ない、知らないといった生徒が増加しているように感じる。実際に、授業等で、当たり前に知っていると思っていたことを全く知らない、興味がないといった反応が返ってくることも多くなっている。そのような、状況において、新聞を活用する教育は大変重要であると感じる。生徒たちには、「今は知らないこと、興味のないこと」にこそ、新しい世界や、自分を変える出会いがあるかもしれないということを、新聞を通して考え、学んでもらいたいと願う。それを支える学習活動を今後も継続的に行っていきたいと考える。

教育に新聞を
和歌山県NIE（エヌ・アイ・イー）推進協議会
ホームページを活用ください
～和歌山県の新聞活用授業実践例を紹介したサイトです～
アドレス＝https://nie.kiiminpo.jp

第12回「いっしょに読もう！ 新聞コンクール」

全国優秀賞に　北野 伊武季さん（和歌山大学教育学部附属小学校６年）

全国奨励賞に　湯川 萌絵さん（県立日高高等学校附属中学校1年）

日本新聞協会は、このほど第12回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の受賞者を発表しました。

全国から６４，５１３編の応募があり、小・中・高校部門の最優秀賞を各１編（合計３編）、優秀賞を校種別に各10編（合計30編）、奨励賞を１２０編選んだと発表がありました。また、団体応募校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各校の合計15校、学校奨励賞１９７校が選定されています。

そのうち全国審査会で、優秀賞に和歌山大学教育学部附属小学校６年の北野伊武季さん、奨励賞に、県立日高高等学校附属中学校１年の湯川萌絵さんが選ばれました。優秀学校賞に県立日高高等学校附属中学校、学校奨励賞に和歌山市立高松小学校、みなべ町立上南部小学校、海南市立東海南中学校、すさみ町立周参見中学校が選ばれました。

また、県審査会において、優秀賞に29名、奨励賞に38名を選定しました。県内の受賞状況は、和歌山県ＮＩＥ推進協議会ホームページ（https://nie.kiimin-po.jp/）に掲載しています。

第13回「いっしょに読もう！新聞コンクール」はすでに始まっており、作品の提出締切りは、２０２２年９月７日（水）です。多くの学校、多くの児童・生徒の皆さんの参加をお願いいたします。

なお、応募の詳細については、日本新聞協会ＮＩＥホームページ（https://nie.jp/）をご覧ください。

北野 伊武季さん

湯川 萌絵さん

※写真掲載は保護者の了解を得ています

第13回 いっしょに読もう！ 新聞コンクール

日本新聞協会は、今年も「いっしょに読もう！新聞コンクール」を実施します。
家族や友人といっしょに記事を読み、感想・意見などを書いて、記事とともに応募いただく新聞感想文コンクールです。

●対　　象：小・中・高校・高等専門学校生　　**●応募締め切り：2022年9月7日（水）必着**

●募集要項：2021年9月8日～2022年9月6日の新聞協会加盟社等が発行する新聞から興味を持った記事を切り抜き、
家族や友だちにも見せて意見を聞いたり話し合ったりしたうえで、応募用紙に記入して記事といっしょに送ってください。

主　　催：一般社団法人日本新聞協会　　**コンクールの詳細**（応募・問い合わせ先、対象紙一覧 など）**▶NIEウェブサイト　https://nie.jp**